

---

# 明日はきっと・・・

井川 ジュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日はきっと・・・

### 【Zコード】

Z9925F

### 【作者名】

井川 ジュン

### 【あらすじ】

明日がある、次がある。それはとても幸せなことだと書いていて感じました。

## 内角低めに直球を

「ちょっといいか」

ベンチで芸能人の始球式を退屈そうに見ていると、投手コーチの木村が隣に腰を掛けた。

「・・・お前ももう引退か、・・・時の流れってのはつらいもんだなあ」

木村はそのまま俺の肩をバシッと叩いた。

「利き腕叩くなよ、ボケコーチ」

俺は叩かれた左肩を押さえて怒鳴った。しかし木村はそれに対しては何も言わずに変わりに、

「・・・覚えってか赤沢」

「あん?」

「俺が現役時代、若手のお前をモヤシだとか言ってからかったもんだ」

「ああ、そうだったな。あの時俺は初めて、こいつより強くなりたいって対抗心燃やしたよ」

「結局俺のほうが勝ち星多かつたけどな」

「俺のほうが2年も長く現役だ」

「それでも俺のほうが勝っているのは何故だ？」

と言つて、笑つた。

「最後つて、どんな感じなんだ？」

俺は苦笑交じりの声でそう聞くと木村は急にまじめな顔をしてぼそつと呟いた。

「それは、お前が確かめてくるもんだ」

「・・・そうか」

いつも笑っている木村の真面目な表情は現役時代に日本のエースと言われた木村耕介の顔だった。

観客が騒ぎ始めてやつと自分でも気がついた。

フイニング無四球ノーヒット。

1995年は7回まで投げることも無かつたし勝ち投手の権利を得たこの回にも、交代を告げられなかつたのが不思議だった。

最初は引退試合だからという理由かと思ったが、まさか完全試合に期待されるとは。

そう思つと、やはり緊張してきたのか手から汗が出てくるのが分かつた。

「まさかな・・・」

俺はとにかくそのことをあまり頭に入れずに8回のマウンドに上がつた。

4番の外人選手が打席に入った。俺より頭2つ分でかい身長は、マウンドから見た俺よりでかいよつに感じる。

捕手からのサインは内角低め直球。

捕手である斎藤に言わせれば、俺の直球は手元で少し曲がるので打ちにくいうらしい。それでその球が一番活かせるコースが内角低めなのだと、20歳年下の斎藤は自信満々に言つ。

俺はサインの通り、内角低めに直球を放り込んだ。

もはや140前後しか出ない俺の直球を外人バッターは豪快に引っ張つた。

しかしそれは、ボテボテのサーブ・ゴロで、若手の三塁手はおぼつかない手つきでそれを処理した。

続く5・6番もレフトフライ、ショートゴロに打ち取った。

残りの9回は打率2割にも満たない下位打線と相手投手だけだ。

もう頭は真っ白だった。

結局、1点リードで9回を迎えた。

7番と8番は打ち急ぎボール球を空振りして三振。3年ぶりの2桁奪三振を取った。

続く9番の投手はやはり代打が起用されベテラン、と言っても俺より10歳も若い打者が打席に立った。

(やっぱ、落ち着いてるな・・・)

だから、敵の監督もこの打者を代打にしたのだらう。パワーのある若手より、場慣れしたベテラン。使い分けの上手い監督だ。

俺は最初のサインどおり外に逃げるショートを放った。

ボール、と審判が低い声で言つ。

次の球は外角低めへストライクぎりぎりのスクリューボール。

ストライク！今度は甲高い声で審判が叫ぶ。

そして高めの釣り球。ここはバッターが落ち着いていた。バットはピクリとも動かず、判定はボール。

次は外角にボール球。これで1ストライク3ボール。

そして内側へストレート。それなりの打者ならここは振つてこない。これでフルカウント。

そして次のサインは、内角低め直球。

俺は振りかぶって、投球モーションに入った。

そしてそのまま腕を思いつきり振りぬいた。

ゴンと鈍い音が響いた。俺は後ろを振り向いたが、そのときにはもうボールはスタンドに吸い込まれた後だった。

甘めに入った。そう感じた直後だった。

木村がマウンドに向かってくる。投手交代だ。

次こそはー!と一瞬思ったが、そういうえば今日が引退試合だと木村の表情を見て思い出した。

涙が流れることに気がついた。

もう一度投げられれば、そんなことを思つたのは初めてだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9925f/>

---

明日はきっと・・・

2011年10月5日18時19分発行